

ベンスーサン『二つの道徳』について

・翻訳の経緯

ベンスーサン先生退職1年目の際に自宅訪問・・・→2024年度に1年間のサバティカル

・翻訳について

比較的難しめの文章を読みやすい翻訳にする工夫をケースバイケースで
哲学分野のフランス語読者としての常識が不可欠(cf. « inquiétante étrangeté »)

・『ル・モンド』誌面でベンスーサンの半生の特集

代表作として、『二つの道徳』が挙げられている

・倫理学を学んでいると自然と共感できる課題設定の本

教科書で通常習う倫理学（カントの義務論、ベンタムの功利主義・・・）と、レヴィナスの倫理の関係とはいかなるものか？

・味わい深いカント

他者と感情から逃れられないことを前提にしつつ（「根本悪」）、他者と感情を道徳規範に入り込ませないことに苦心するカント

「今日まで道徳的行為は一度もなされたことがないということはあることであり、考えられうることだ」(vi)

・カントに対するニーチェ

このカントの苦心(Scheidung der Moral)を見抜き、それに対する批判と、道徳を感情から基礎づけようとする努力とした哲学者としてのニーチェ

「価値の系譜学および思考の長所は、道徳とその価値転換に関して、情動や感情に、すべての道徳的欲望の一体化する台座やそうした欲望の衝動としての生に確かに場所を与えたことである。」(92)

・レヴィナスとカント

レヴィナスの場所論は、カントの「道徳の分離」と一致している。

「レヴィナスの場所論は、二人あるいは対面の領域、すなわち近さを、複数の主体の領域、すなわち正義と区別している。」(104)

・和解＝超越行為(trans-action)

二人関係の領域の倫理と、政治領域の倫理の間には境界があり、その境界を消すのではなく、両者を和解させ、この境界を行き来することが必要である。

「この命令的かつ不可能な、近さと正義の超越行為は、合意の限定的、暫定的、一時的な結果でありうる妥協や調停と同一ではない。それはいつまでも、対立するものを直接、横断航海することをやめず、展開や駆け引き、さらには和解対象と呼べるものさえ生み出していく。和解対象とはすなわち、多かれ少なかれ制度的な形式、た

たとえば憲法や協定、たとえば真実和解委員会のような委員会のことである。民主主義は、終わりなき和解の行為であると同時に、それが生み出す和解対象、新しい力関係や新しい対立、したがって新しい和解対象から到来する契機と再び示談して手直しする和解対象である。」(160-161)

・暴力の位置づけ

暴力は、この和解=超越行為を拒絶し、すべてを我有化し、他者を消すことを目的とした行為である。

「また、哲学に特有の暴力が存在しうる。それは「概念の暴力」であり、哲学の外部にあるものの多数性、多様性、混沌性を引っ掻いて掴み、それを同質性、統一性に還元し、すなわち、打ちのめすのである。」(162-163)

「したがって、イスラエルの平和主義者の潮流が「*basta* (もうたくさんだ、これ以上はやらない)」と名乗っているように、境界が越えられたときに憤慨する運動が声高に叫ぶ「*yesh gvoul* (限界はある!)」の意味で、限界が見出されなければならないのである。」(165)

・思考あるいは理性と暴力の関係

思考は限界を知らず自己展開していくものであり、暴力に、悪になり得る。

「こうした狂気[=パラノイア的政治]は、健全な合理性の論理的な行使としてしばしば現れる。この合理性はつねに、思考の連続性、通行、媒介を織り上げなければならない、分離、引き裂かれ、止揚なき差異のあらゆる形象に直面することを恐れる。」(154)

・アーレントの「悪の凡庸さ」について

アーレントはアイヒマンの「悪の凡庸さ」を彼の思考欠如に求めたが、むしろ彼の思考の合理性をアドルノとホルクハイマーの言う「理性の限界」から理解すべき

「ヨーロッパのユダヤ人やツチ族やアルメニア人の殲滅やカンボジア人のジェノサイドが、理性や精神、さらには「哲学」を欠いていたと考えてはならない。それは啓蒙主義の欺瞞的な魅力に屈することであり、啓蒙主義はまさにこの点に対して、私たちに盲目にしている。人類に対する大きな罪は、理性の光の暗い裏側、その眠りから産み出された怪物ではない。暗闇の口は合理性をはっきりと述べ、すべてを技術神話的なこだまで満たす。そして、恐怖がそれらを聞こえなくするわけではない。」(158)

・純粋な理論書の枠を越えている要素：和解の政治の模索

現実の政治、イスラエル・パレスチナ紛争を意識し、和解・妥協の政治の主張している。昨今も政治的発言は積極的。

cf. « Critiquer la politique d'un gouvernement israélien quel qu'il soit, celui de Netanyahou ou un autre, en temps de guerre ou en temps de paix, n'a par soi-même rien à voir avec l'antisémitisme – rien, il faut le dire et le redire. » (Gérard Bensussan, « Netanyahou-Macron : chronique d'un été épistolaire », *Revue K.*, le 10 septembre 2025)